

2023 年 10 月 28 日(土)夜『神聖で繋がり合う日』 メール前文と始めの話

2023 年 10 月 28 日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 メール前文

忙しい現代生活のなかで生きているうちに、知らない間に”なんとなく生きてしまっている感覚“になることがないでしょうか。それは、私達がこの世で生きるために”いのちの源“から与えられた”五感の感覚“を錆び付かせてしまい、惰性でしか”いのちの力“を活用できていない状態です。

なぜそうなるのかと申しますと、現代生活は何かとせわしく、”やらなければいけないこと”と”情報”の濁流に流されるうちに、いつの間にか元々心に備わっている”ゆとり(余裕)“をすり減らしてしまっているため、一種の現代病のような状態だといえます。

そのような時代であるからこそ、私達には心のゆとりが必要です。それは例えば、瞑想を通して”いのちの源”と一つになる時間を持ったり、自然と触れ合う時間を持ったりすることなどが挙げられます。時間の多寡は関係ありません。少しでも時間が空いたなら静かな空間で眼を閉じ、いのちの奥に心の手を伸ばして、ゆったりとした呼吸と共に意識視座を奥へ奥へと移してみてください。

そうしますと、私達が”自然界の一部“であることを”いのち“が教えてくれます。それを感じられたら、テレビやパソコン、携帯電話やタブレットなどの電源を切り家に置いて、外へ出てみてください。私もこのところ努めて行なっておりますが、都会の方は近所の道や近くの公園でもかまわないと思います。

自然の豊かなところに住んでおられる方は、家から出た瞬間に広い空さんや空気さん達が出迎えてくれます。高層マンションやビルに囲まれた都会でも、意識を向けるだけで自然が私達を出迎えてくれます。

そのことから私達の意識は、忙しさの中にあって自然とのふれあいに喜びを感じる心の動きを遮断していたことがわかります。私達は、自然と触れ合う能力を持っていたことさえも忘れていたのです。

すでになさっておられる方もいますが、外へ出たら、道を歩きながら道ばたの植物に声をかけてみてください。(心の中でも可) 都会の方は、道ばたのアスファルトやコンクリートの隙間から咲く生命力豊かな草さん達に話しかけてもいいかも知れません。

また空を見上げて、天から降り注ぐ陽気を吸収してみてください。鳥さん達の声に耳を傾けてみるのもいいかも知れません。今の季節の夕方以降でしたら、虫さんの音に意識を合わせるのもいいかも知れません。

時間に余裕があったら、空気で繋がり広がる空間に意識を溶かし広げてみてください。肺の中を空っぽにしてから感謝を込めて、空気を胸いっぱい吸い、吐き出す。それを繰り返すだけで、私達の五感が本来の機能を取り戻し始めます。

そうすると、ひとつひとつの所作を丁寧に行なう気持ちが甦ってきます。”今ここ“を大切に味わう気持ちが芽生えてきます。「私たち人類は、森羅万象の何とでも心の交流ができる存在だったんだ」という心底からの気付きが湧いてきます。

土曜日の夜はそうにして、五感を研ぎ澄ませた感覚をもって、本当の今をノージャッジで味わいな

がら、一瞬一瞬を抱きしめる神聖の視座に立ち祈ってまいります。そうすると、現象の変化に一喜一憂することなく、私達の今の意識が輝かしい未来を創造していることを自覚できます。

そのときには、地球を抱きしめるように”いのちの体温”を乗せた神言(しんごん)を発して、暗い現実の奥で、すでに出来上がっている明るい未来を今ここに書き出してまいります。

2023 年 10 月 28 日(土)夜 『神聖で繋がり合う日』 始めのお話

皆さま、こんばんは。夜のズーム祈りの会を始めます。本日は、先々週までのいつもの流れで進めてまいります。

今日の『動画による祈りの会』で、「弊れば則ち新たなり」という老子のお話が出ていましたが、そのお話を現代に当てはめてみますと、「弊れる」に焦点を合わせて見ている方は、“滅亡せざるを得ない事実”に引っかかり心を曇らせ、「新たなり」にフォーカスして見ている方は、“私達が今まさに展開している新たなる神聖文明の世界”が地上に定着した様子に胸を躍らせて、心待ちにして生きておられます。

そうした事実を俯瞰の視座から観ますと、「終わりなければ始まりなし」ということで、終わりも始まりも同じ出来事の裏表であり、だからこそ「弊れば則ち新たなり」という言葉になるのだと思って聞いておりました。

ところで、何日か前にピースレターでショーゲンさんの話を紹介しましたが、私達日本人の生き方を縄文の昔にまでさかのぼって見ますと、「人間だけが特別な存在だ」などとおごり高ぶることなく、すべての存在と繋がり合いながら、自然や生物たちと共存して生きていました。またその時代の人々は、人間同士の諍(いさか)いごとはその日のうちに水に流し収めるというルールがあったので、殺傷沙汰など起こりようのない調和した生き方をしていました。

縄文時代は紀元前一万六千年前後に始まり、紀元前三世紀から十世紀くらいまでの間続いたといわれていますが、発掘された遺跡に武器や武具などが見られず、また殺傷沙汰を想起させる傷のない遺骨ばかりが発見されることから、世界でも珍しい平和な古代文明だったのではないかとされています。

アジア大陸から様々な民族が流入してきた弥生時代以降、日本が男性中心社会となり、争いごとが一般的になったことから推察すると、縄文の時代には、神聖に繋がった叡智をもった指導者がいて、女性中心社会のなかで人々は、女性性と男性性をバランスよく併せ持って生きていたのではないかと考えられます。

また、縄文の人たちがみんなで協力して、一万年以上もの長い間、争いごとにもせずに生きていられたのには、それ相当の生きる智慧があったのだと思われます。それが最近わかったことですが、タンザニアのブンジュ村というところで、約 200 名の村人達に引き継がれ、今に活かされていることがわかりました。

ピースレターで紹介しましたが、ショーゲンさんという日本人のペンキ画家がその絵を習いに村へ入

ったことがきっかけでそのことがわかったのですが、彼は村に入ったばかりの頃、あまりにも村に伝わる日本人像とかけ離れていたため、中東から来たのではないかと疑われたり、今この瞬間をしっかりと生きていなかったことから、「ここにいない人」というニックネームをいただいたりするなど、はじめの頃は散々な扱いだったそうです。

しかし、一年半の滞在期間に、村長以下、村人達から縄文時代の日本人の生き方を教わったことで、ショーゲンさんは日本人本来の生き方を取り戻されました。そして、「日本に帰ったら一人でも多くの日本人にこのことを伝えてほしい。日本人が2025年7月5日までに日本人本来の誇りを取り戻せたなら、地球の未来が明るい希望に満ちたものになるのだから」という村長の依頼を受けて、今各地で精力的に講演会を行ったり、本の出版やYouTubeでお話したりするなどの活動をなさっています。

私は彼のお話を聞いたときに、日本人として本来持っていた古来からの血が沸き立つと共に、彼に紹介された生き方の数々が、私達の生き方と重なり合っていることを直観的に感じ取りました。

本日はそのような、日本人が元々持っていた“自然や生きとし生けるものと繋がり合った生き方”を私達みんなが体現しながら、争う必要がない生き方、対立する必要がない生き方の種を、人類すべての守護霊様に託すことを通して、神聖復活の潮流をより確実なものにしていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

それでは、世界平和の祈りを日本語と英語で行ないます。三分半のCDを使って行ないますので、眼を閉じて神聖の視座に焦点を合わせてお祈りください。私が「はい、ありがとうございます」と申し上げましたら目を開けてください。それでは始めます。